

論文内容の要旨

申請者 穴井 えりも
ANAI, Erimo

論文題目

糖尿病とともに生きる人への待つ看護モデルの開発
Development of the Waiting-Nursing Model for People Living with Diabetes

I. 研究の背景

近年、糖尿病とともに生きる人は増加しており、糖尿病の発症や重症化予防は国家的課題である。糖尿病看護においては、合併症などの予防を行いながら、その人らしく生きていくことの支援が重要とされている。しかし、生活習慣の改善を伴う行動変容は、自覚症状があまりない当事者にとって困難を伴うことも多い。また、行動変容に時間を要することは、支援を行う看護師たちにとっても、実践への手ごたえのなさにつながっている。これまで糖尿病とともに生きる人の支援においては、行動科学に基づく行動変容のための学習理論が強調され多く用いられてきたが、自覚症状が乏しく長期間にわたる療養が必要である糖尿病とともに生きる人への支援においては、行動変容モデルでは限界がある。一方で、熟練看護師が行う看護は、患者に合併症の恐怖感を植えつけ行動変容を強いるようなかわりではなく、患者の中にある主体性に信頼を置きながら、患者の変化をせかさずに傍で待ち続けている。このような待つというかわりは、これまで具体的に探求されておらず、理論化した研究はみられない。

II. 研究目的

本研究の目的は、糖尿病とともに生きる人への待つ看護モデルを開発することである。理論的な検討を通して待つ看護の概念を明確にし、実際の事例とその分析を統合して、待つ看護について説明するモデルを開発する。

III. 研究の意義

待つ看護モデルは、長期にわたる療養が必要とされる糖尿病とともに生きる人が、もてる力を発揮しながらその人らしく生きることを支援するための、新たな看護の方針を提供する。また、看護師が自身の看護を振り返り支援を発展させることが可能となる。

IV. 研究方法および倫理的配慮

本研究におけるモデル構築の方法は Schwartz-Barcott & Kim (1986; 2000) の Hybrid 法と Walker & Avant (2018) の理論統合を参考とし、理論の相、フィールドワークの相、統合の相の3つの相で構成した。統合の相では、専門家会議によりモデルの妥当性を検討した。本研究は、シンボリック相互作用論を前提とした人間の主体的在り方、環境との相互

作用、各人が行動の方向を適合させることで連携的行為が成り立つという考えに基づく。

1. **理論の相**：待つ看護の文献検討と概念分析を行い、待つ看護モデル（案）を作成した。
2. **フィールドワークの相**：理論の相で作成した待つ看護モデル（案）の具体的実践を得ることを目的にフィールドワークを行った。研究参加者は糖尿病看護に関連した資格を有し、日常的に糖尿病患者の看護実践を行う看護師 9 名と、その看護師が療養支援を行った患者 15 名である。両者に対して、外来での療養支援場面の参加観察と場面毎に両者へのインフォーマルインタビューを行った。さらに、看護師に対しては半構造化インタビューを行った。データ収集期間は 2019 年 11 月～2021 年 2 月であった。合計 40 場面のデータについて、待つ看護について着目し、患者と看護師の状況、看護師のかかわりやその意図、患者と看護師の反応や効果を抽出してカテゴリ化し、初期モデルと比較、検討した。
3. **統合の相**：理論の相およびフィールドワークの相の結果を統合させ、初期モデルを作成し洗練させた。専門家会議を開き初期モデルの妥当性の検討を行った。専門家会議の構成員は、糖尿病看護に熟練した看護師および研究者 6 名であった。

本研究は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認(予備研究承認番号 2019-064、本研究承認番号 2020-008、2021-003)および対象施設の倫理審査会の承認を得て実施した。

V. 結果

1. **理論の相**：文献検討と概念分析により、待つ看護の先行要件、待つ看護の属性、待つ看護による帰結を抽出し、待つ看護モデル（案）を作成した。待つ看護モデル（案）は、待つ看護の先行要件、属性、効果や反応からなる帰結により構成された。待つ看護の先行要件は、時間を要する状況、待てるかどうかの判断の 2 つがあった。待つ看護の属性は、患者志向の待つ目的、看護師の待ち方の 2 つの属性があった。待つ看護による帰結は、患者の変化、看護師の変化、両者の相互作用の 3 側面があった。

2. **フィールドワークの相**：待つ看護を行った支援場面 40 場面を分析した結果、糖尿病とともに生きる人の状況を示す 5 つのカテゴリ、待つ看護師の状況の 4 つのカテゴリ、待つ看護の具体的実践を示す 6 つのカテゴリ、患者の反応や効果を示す 5 カテゴリ、看護師の反応や効果を示す 4 カテゴリ、周囲へ波及する効果を示す 2 カテゴリが見出された。

3. **統合の相**：理論の相とフィールドワークの相の結果を統合し初期モデルを作成し、専門家会議により意見を得た後、モデルの修正を行い図式化した。糖尿病とともに生きる人への待つ看護モデルの構造は、患者と看護師の相互作用を示しており、第 1 から 4 位相を含む。待つ看護は、看護が一方向に進み終わりがあるのではなく、第 1 から第 4 の位相を循環しながら拡張し発展する。また、モデルの中心概念には、各位相において貫く《調和》がある。待つ看護モデルには、お互いの関心が触れあう《調和》、糖尿病とともに生きる人のペースとタイミングに応じてダイナミックな看護として融け込む《調和》、互い

の成長を認め合うなかでの関係性における《調和》、同じ方向を向き歩むという方向性における《調和》があった。さらに、これらの待つ看護全体に影響を与える《環境》があった。《調和》が意味する概念が各位相のテーマである。以下に抽出した概念を《》、フィールドワークから抽出したカテゴリを【】としてモデルの構造を示す。

(1) **第1位相：目の前の人への関心と接近** 第1位相は、《目の前の人への関心と接近》という待つ看護の前提となる状況を示している。看護師は、糖尿病とともに生きる人を部分的に見て行為するのではなく、絶えず変化している全体としてのその人を知ろうと近づく。そして、その人の価値観や思いに迫り、全体像を捉えようとする。同時に、糖尿病とともに生きる人もまた、目の前の看護師のしぐさや言葉に込められた意味を感じ取り解釈し、自身の価値観や思いを伝えるために、目の前の看護師に関心を向け近づく。

(2) **第2位相：関係性を基盤としたダイナミックな待つ行為** 第2位相は、待つ看護の具体的実践が融合し、糖尿病とともに生きる人のペースとタイミングに応じてダイナミックな待つ行為となることを示している。具体的実践には、《時機を逃さない行為》《待てるかどうかの吟味》《待つ距離感》がある。《時機を逃さない行為》は、【一步踏み込む時機を見極める】【一步引いて相手に委ねる】からなる。この看護は、看護師が一步踏み込む時機を見極めたり一步引いて委ねたりしながら、糖尿病とともに生きる人が気づいたり感じたりする僅かな変化を逃さない看護である。《待てるかどうかの吟味》は、【待てるかどうかを見極める】からなる。この看護は、看護師が目の前の人待てる状況にあるかどうかをその人の今ある姿から、繰り返し丁寧に確かめる看護である。《待つ距離感》は、【つながりを切らさない】【問題解決への執着から意識をずらす】【その人となりを捉え直す】からなる。この看護は、糖尿病とともに生きる人と看護師が依存や対立することがなく、その人の主体性を大切にしながら関係性を築く看護である。これらの看護は融合し、糖尿病とともに生きる人のペースとタイミングに応じたダイナミックな待つ行為となる。

(3) **第3位相：お互いが成長途上にある人と認め合う** 第3位相は、《お互いが成長途上にある人と認め合う》であり、待つ看護の効果と反応を示している。糖尿病とともに生きる人は、待つ看護により、《看護師に支えられていることの実感と自己の成長》に至る。同時に看護師も、待つ看護をとおして、《周囲に支えられていることの実感と看護専門職としての成長》に至る。糖尿病とともに生きる人と看護師は、共に過去から未来へと向かう時間を共有しながら、刻一刻と変化し成長してゆく存在であると相手の存在を認め、《お互いが成長途上にある人と認め合う》ことに至る。

(4) **第4位相：お互いが同じ方向を向き歩む** 第4位相は、《お互いが同じ方向を向き歩む》であり、待つ看護の効果と反応からなる超越した相互行為を示している。《お互いが同じ方向を向き歩む》は、糖尿病とともに生きる人と看護師がお互いの行為を意味付け

しながら、共に歩むパートナーとして認め合い方向性を共にして歩むことを意味する。このテーマは、各位相のテーマを行き戻りしながら、超越した相互行為を生み出している。

VI. 考察

糖尿病とともに生きる人と看護師の相互作用を示したこのモデルは、待つ看護が両者の相互作用から生み出されることを意味している。待つ看護モデルは、行動変容の結果のみにとらわれず、行動変容に至る前の段階の気づきやきっかけを捉えて働きかけ、相互作用するからこそ生じる調和を紡ぎながら、糖尿病とともに生きる人と看護師が自己を拡張し発展させ、その人らしく生きることを根底から支える看護を示したといえる。

本研究における待つ看護モデルは、《調和》という概念が軸となっている。第1位相から第4位相までの待つ看護を貫く《調和》は、糖尿病とともに生きる人と看護師の間に相互作用としての一体感を生み出す。待つ看護モデルの相互作用として《調和》が見出されたことは、一方的な教育や指導には支援の限界があることを示している。このモデルは、糖尿病の療養への負担感などによって前へ進むことが難しい人に対して可能性を探りながら寄り添い続けるその伴走の仕方を具体的に示す、新たなモデルと考える。

待つ看護モデルの《環境》は、糖尿病とともに生きる人と看護師の相互作用に影響を与え、ここには時間や人間関係などが含まれる。行動変容の結果を出すことのみにとらわれず、これでよかったのだろうかと自身の看護を振り返りながら、看護の質を向上させてゆく環境を整えることの重要性が示唆された。

本研究で提示したモデルを発展させるためには、糖尿病のみならず慢性疾患とともに生きる人へと対象を広げ適応可能性を検討する必要がある。

図. 糖尿病とともに生きる人への待つ看護モデル

